

新編 下
 二編
 新編 下

13
 3170
 6



門 へ 13
3170
巻 6

清談和歌翠卷之六

第十回

新家の佐重もその困窮と憐れむと
表裏の情とて世胞もや小園とてせけんか改かんをひくと
いどえ来か改もその勝戲よりも往堅く金よりも
重けさび仇も方ふらさうゆ山引る雲のなり。然もさび
過分の物とりく共りらたの再四も三回ゆかく辞とく

昭和十三年
六月二十日

ありふも強らるといふ是と受くは尋ねの定女
 ぬぎると依重へともくはくさく多く渠と相討ふ
 扱ひとも怒りて。や何れども堅くとも骨殖と以て
 ことと美利と依りて心筋の動ぬとやいふんと密に
 ことと旅店の人候をいふ候りて。前尾より我も
 入るべし多くの黄金りく骨殖とたまふとあるあど
 志すといふと強敵のんう。仔細あり兼いといふ
 渠と強をいふといふ合さる今いふや心算と依重

悦び夜の眼も寐をふその便宜と。今うくと強
 とももて候志あり何れなる。緯懸へんと針校ども
 う得食人の片有女子ふ不業とせよとて初むとの後
 名新さふはと考へ返の返事あつた女どもふ合もせ
 渠等がけより。初めまするふおとなりの女に
 方ありと吐理不巧とをいふ。さく返事あつた女のうち
 心利する甲しお少一の通りなどいふ。老角縁より
 針らふと首尾さるうの新家の旦那が寝衣も炭干も

暫とある宵と折紙とのひ縁せむ歎出の身とも忘る
 擇女まきそまの夜帳等が。徒念まきとそその回答も性
 けきどの儀たらん裡ふ左根甘く性ぶよいつと強び
 るるべし。初てその夜も函書あふおあのあるまき未
 一とふ。使承お政の病人の身業まどつ倒のあろ。
 隣へゆらん。函書あいの白史婦ふうち對ひ「毎夜
 モウあがさう。今夜も初あのと折紙とごひますす
 女房
 一「今今夜のさうあるからう。まごおわがあません

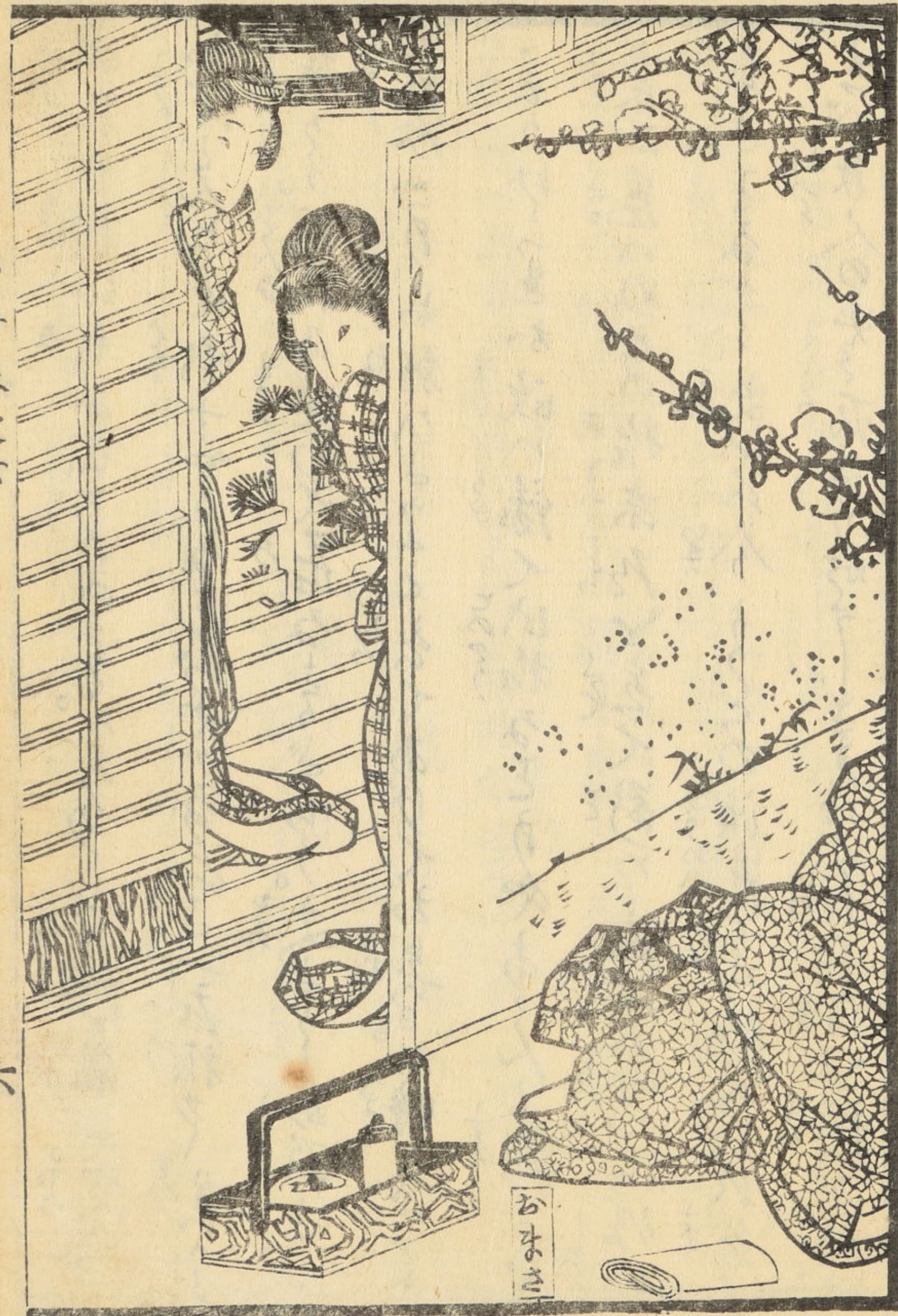
一「ヨマまぢや。此のおあさあ。お使あいの何まをさる
 申す子へハテ子手振をおあいの。ほどかけるとあげあ
 若ぶが。ヨマ、お使をさるまはら。お使もま、藤忍の
 トひ捨く出たとさると呼之まきと振をう「ヨマごあ
 お方ごんを。ちよつとか。お振お承すまあうまはら。
 いらちき。い方へあぐお是なまらト細とひまてまあう。小離と水
 ぬか力水の間小減かう。言の始の、お晴は方お居せん
 手もひつらう。情へうらま。一「ナ化のりちやアあいつ子

おたねが...の活中にお出なさいとてその日...兄弟...
あのさう小孩切子作り...お出なさいとてその日...
の旦那とのお出なさい...
挨拶の仕度...
お別れの御儀...
佛ごとく晩...
おたねが...の活中にお出なさいとてその日...
あのさう小孩切子作り...お出なさいとてその日...
の旦那とのお出なさい...
挨拶の仕度...
お別れの御儀...
佛ごとく晩...
おたねが...の活中にお出なさいとてその日...
あのさう小孩切子作り...お出なさいとてその日...
の旦那とのお出なさい...
挨拶の仕度...
お別れの御儀...
佛ごとく晩...

「何れも...お出なさいとてその日...兄弟...
おたねが...の活中にお出なさいとてその日...
あのさう小孩切子作り...お出なさいとてその日...
の旦那とのお出なさい...
挨拶の仕度...
お別れの御儀...
佛ごとく晩...
おたねが...の活中にお出なさいとてその日...
あのさう小孩切子作り...お出なさいとてその日...
の旦那とのお出なさい...
挨拶の仕度...
お別れの御儀...
佛ごとく晩...
おたねが...の活中にお出なさいとてその日...
あのさう小孩切子作り...お出なさいとてその日...
の旦那とのお出なさい...
挨拶の仕度...
お別れの御儀...
佛ごとく晩...

まるるの長保今新しくおまをを努めるのもおま
 がの世依ふつとお落ごのみヲ何こまよまらぬのう
 いやくお招りしつとつとんがまぢやアよりや長保とも
 小まんごう心とお世でもあまのイおまんごう
 ちヨト唯おまの家の婢女なり。お千の命はうけつ
 来て居りし中ま処へ出先刻々のつとつとつと
 お改えおつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 惚ぬつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

乃至死んでも厭はねとくつとつとつとつとつとつと
 や困女おするよつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 お情ごとくお情等がする者よつとつとつとつとつと
 お情こつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 溢さるつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 比依切義理おもつとつとつとつとつとつとつとつと
 流しくつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと



けね けねる 弱い 弱さ 弱さ 弱さ
 けねる 弱い 弱さ 弱さ 弱さ 弱さ
 お方 さん さん さん さん さん さん
 底 底 底 底 底 底
 吾儕 吾儕 吾儕 吾儕 吾儕 吾儕
 こころ けしき けしき けしき けしき けしき
 安未 小 差 ぬ ぬ の 始 末 及 及 及 及 及 及
 る あり あり あり あり あり あり
 まば 良 人の 実 實 あり あり あり あり あり あり

重 重 重 重 重 重
 良 人 の 勢 之 流 と 途 途 途 途 途 途
 い せ ん と 一 の 胸 胸 胸 胸 胸 胸
 由 由 由 由 由 由
 好 好 好 好 好 好
 所 所 所 所 所 所
 結 結 結 結 結 結

自由のきどく。やまふも構ひらふ。おさるのあつふ成く下が
私への及ふ背き。且那由もこの土地への名も知れず。株を
居るうゝ人の女房を取つて。おさるのちや。まはるの秋も持つ
り。おさるの世にあつたふさ。お病人が恨ある。おさるのまご。おれ
お病人あつたふ。お細きまは。おさるのあつたふ。お病人のあつた
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の

いひまあいの千花なるい編。おさるのあつたふ。お病人のあつた
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の
お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の

お病人あつたふ。おさるのあつたふ。お病人のあつたふ。お病人の

抱練めまの晴ぐらゝまゝと知る。お改の少一身と及けん
 へ新家の旦那でございませう。今由命うおあ松のついで
 吹ま一人私をもち物振おう様しくおのゝ居ませう。けとととよふ
 任せお世方の笑理の率おあ松の香少一。氣と長くして
 お美なるのヨト参らば疎らぬは定お一待とのみたう。二年
 三月何れも心由候のせうが是れ不どまを不ぬ人のろ。お松
 若あらばと空ぢやアねく。但一節の芽振の香とい人の
 支あぶ。まゝ世方おゆる張りと應意あり。氣お桃まうとく

元來懐惚子の心よ何と蒼へんやもさくは陽の涙を力小
 昔世あまをいも引傳るもの手紙押へて下体重ん
 変おとつてお美ふさるる。ととア何松ともさませう。が
 今夜の世體のさあひ何年。モウ三日待て居てお美ふ
 ちのこ甘くゆふ昔の狂お小月の隣りの方と云々。夏ま
 と誰やうと云ておく。お松とまをいも。とて「お正は
 おどいませう。お新なるう。ふ。と。お松ふ。を。は。て。ど。う。ま。の
 せう。へ。お正は。ま。う。誰。方。う。松。く。ま。る。う。信。屋。の。次。由。や。ア。ア。イ

吾もいよいよおせん、^い當座^ざ遊^{あそ}びの二日^{ふた}は三日^{さん}までその上
はのちて通^とせんよと胸^{むね}苦^{くる}く喰^くうふのさうぶ

第十二回

青^{あお}ふお政^{まさ}は近^{ちか}ひらかり准^{まも}備^び整^{ととの}へ出^でゆくを。引^ひちりて
入^い来^き磯^{いそ}志^しの痴^ち人の情^{なさけ}のうへ何^{なに}れぞお梅^{あづま}
ハ。さうはは中^{ちゆう}よりお新^{あたら}つきの大き^{おほ}きふりくもえんやまねど
全^{ぜん}イヤモ何^{なに}やうや種^{しゆ}ふお世^よ居^ゐてあぐてイヤモの
分^{ぶん}ぢやア遠^{とほ}くぐ。却^{かえ}てあやふまねませうイヤ

類^{るい}りのお梅^{あづま}子^こぢやア大き^{おほ}きにお茶^あドヤ中^{ちゆう}くさうはは
お政^{まさ}さん夜^よは大概^{たがい}居^ゐまき後^{あと}へくお自由^{じゆう}であります
甘^{あま}うその代^{しろ}りおやア内^{うち}証^{しやう}が案^{あん}二^に結^{むす}ぶはあやせん子^こ
彼^あれ松^{まつ}まてを仕^しるをうお方のぢやア想^{おも}は時^{とき}世^よを是^{こゝ}
非^ひもある一^{ひと}全^{ぜん}ておせんも否^{いや}であらうが是^{こゝ}小時^{とせう}の笑^{わら}ひで
何^{なに}れも詮^{せん}方^{かた}ありおせん始^{はじめ}めどうご首^{くび}危^{あや}しいくうと
業^あ一^{ひと}中^{ちゆう}く何^{なに}れり箇^{かん}松^{まつ}りお茶^あを湯^ゆまておせん中^{ちゆう}か
茶^あを湯^ゆまてはちやア想^{おも}は標^{めい}鼓^この福^{ふく}ありおせん藝^{げい}が能^{よく}

とりよとんそらちとらち方そらちもは方そらちも五月むい月げつ権けんやうや西さい流りゅう
 約やく中ちゆうへんへんとんとんいふいふががおお方かたのの引ひきままがが宜よろししののるるササ然ぜんも
 有ありりののちちややアア売うれれ物ぶつ多たききででおお松まつ流りゅうりり已いけけハハ松まつへへナナニニおお松まつ
 下かももあありりややせんせん其そのの知しりり者しや人にんのの傷きずきき一いっ口こうああるるアアおお松まつのの
 おおどどけけせせどど流りゅうりりままつつけけちちややアアままとと異いふふ風ふう吹ふききもも流りゅうりり
 まま一いっこのの法ほう針しんもも無む謀ぼうももののササハハ何なにぞぞ異いふふ風ふう吹ふききととハハ一いっ
 ナナニニササ他たののりりぞぞももおお松まつええ流りゅうりりてて松まつのの他たのの金かねぞぞ長ながききとと
 けけいいおお松まつががつつままるる所ところハハおお松まつのの一いっ條じょうととんんなな手て堅かたいい女によぞぞおお松まつ



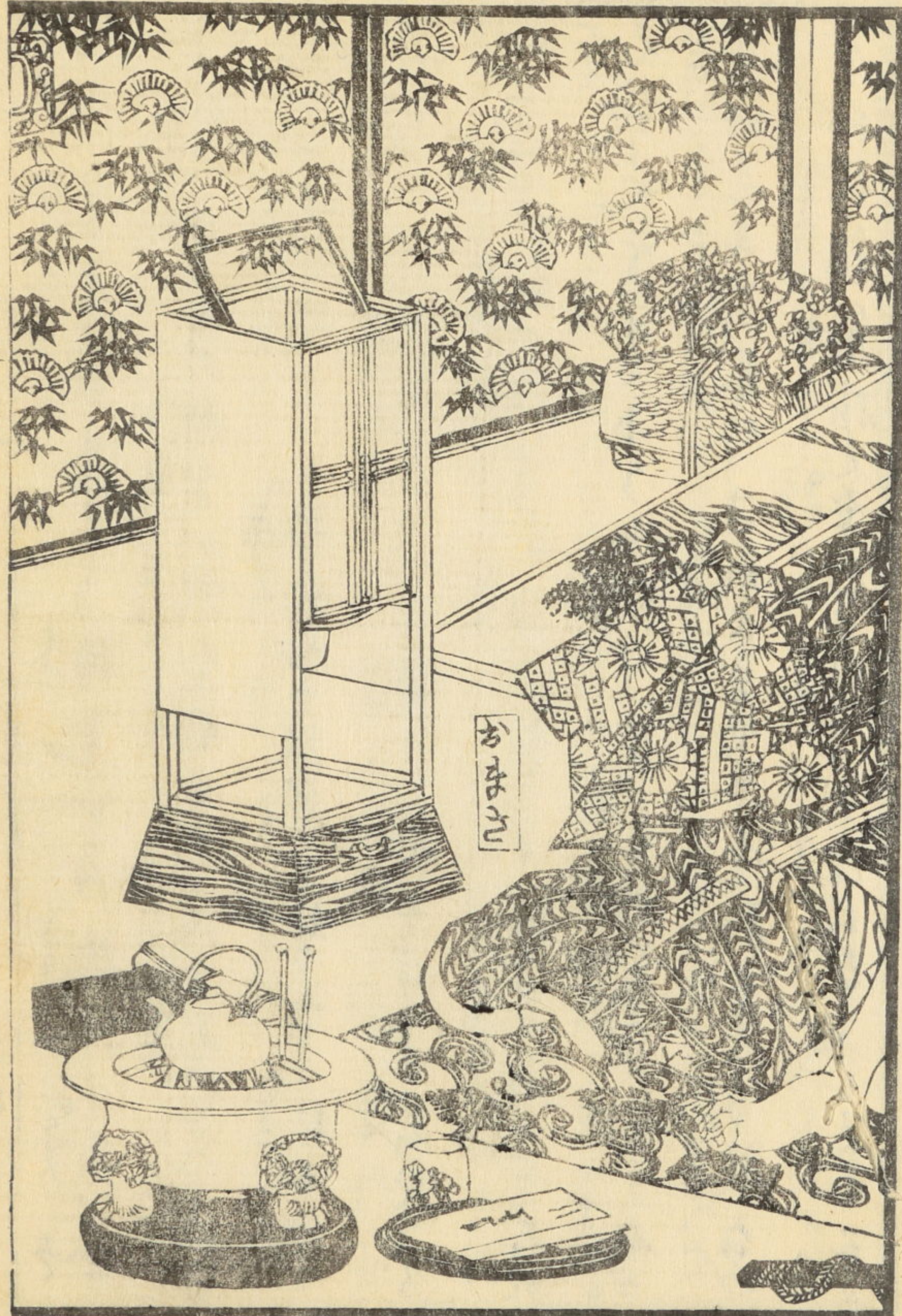
理り不ふ迫せまつつててんんおお松まつのの事ことをを解とくくすすおお松まつのの事ことをを解とくくすす
 又またとと人ひと情なさけ々々先まんんざざうう憎にくむむおお松まつのの事ことをを解とくくすす
 仕し事ことああるる人ひとおお松まつのの後ご指さしととままるる事ことをを解とくくすす
 由よしありりややまま勿なららずずおお松まつのの事ことをを解とくくすす
 けけいいぞぞ知しららぬぬ事ことはは松まつのの事ことをを解とくくすす
 真まんん家かとともも切きりり不ふ可か成せいはは松まつのの事ことをを解とくくすす
 よようう義ぎ理りハハ悪わるくく也なり。まま方かたののままううがが一いっ生せい樂らくでで面めん白はくいいとといい
 りり張はりり不ふ成せいるるままるるめめ入いりりのの也なりももおお松まつのの事ことをを解とくくすす

あつてアア知りやせんが。返り寄りの女どもが噂ふさやアモヤ
何れか。解きねえと出来よ。おきねと下は掛し。が惚れ
小元の付方面持て。イヤな色。些流石と。お小疾ん
を快申ね。お強備と付さる。の。今雨の人情サ。必
け振と。お氣あ。おさ。ち。ア。バ。バ。せん。ヤ。ア。く。お。お。お
え。舞。ふ。来。ん。さん。ご。長。い。一。お。あ。い。や。一。と。佐。か。お。大。事
ふ。な。ま。い。ア。ト。惟。ぞ。一。と。主。出。お。出。の。一。人。今。と。女。よ。り。や
お。政。づ。お。の。ち。う。お。誘。り。も。も。他。心。と。お。い。ん。べ。さ。り。の。お。あ。あ。

さきど。尾羽うちか。一。と。さ。上。お。果。も。さ。あ。あ。の。大
病。些。と。と。お。想。の。獨。と。処。へ。信。切。ご。う。お。稼。さ。ま。ん。モ。シ
お。花。い。ん。お。小。疾。の。う。ま。い。さ。う。く。無。理。な。あ。い。疎。小。女
子。の。お。情。と。昔。の。人。の。お。の。の。何。方。へ。あり。と。低。い。ま。う。へ
流。ま。る。と。い。お。ご。さ。う。な。を。い。例。が。本。音。の。巴。馬。と。破。後。の
坂。類。を。ご。の。百。人。お。稀。な。女。を。さ。ま。ま。軍。が。破。ま。ん。
故。方。の。妻。と。あ。つ。と。の。お。影。も。お。い。居。る。況。ん。一。お。う。の。女。の。お
茶。大。丈。夫。と。恃。ま。さ。る。の。い。實。お。此。方。の。お。い。の。ご。と。お。お。と

枕を搦げくお政と見えや。今サテ香液をさかうておの外の
 小長くあり。そりうけはの雲ふがのほるらうと申さるは後入。
 そこ処々おお小云くわが老少不定の雲然洗く新つ大
 病で七八分い起んご月おモシ羽が目小お記ごあう合う
 路を困らうと申をツウノダ芙蓉の障子。ちう一合年けさ
 びのくもせしき後之が命づ。彼令自己う記ごあう人お不う法
 と出すめんヨ先以由自己が起後一断小死ぬのあんのと云
 ぶ。突ふとらやアたまさ迷ひしや一断小死ぬごとく一断小性

さらりのぢやアあり。まよらう跡小遺つて香華もゆるめて
 くまやア成平うは才の功種小あうア。便うが自のこおつふ
 けさどお根るのこよの道ありと申小世話の仕人の出来
 は男と違つて子知の乳葉サ。殊小年の美はうらうの世も困る
 よも後人知く自己の居お方。さ流る方ふ小あうまさう
 煮の可重も息のあうら一息後。是は万幸。休まるとあふ
 了小おまへみさ。息が彼人の人おそま。跟てらん小異く
 つま。後入う法と知めん。ト入。聖さても。鈴虫の音。後小弱る



ござく 春くあげませうト 鈴へまを 抱取し 素と食
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 まは 抱の その 佐更の 雅人か 新やあんと 名入つて
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 く 名更の 味ましく 存命が 死月と 知るまう 秘り
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 ざる 玉の 佐不 叙来ぎと あり 塚しと へ せうろく 若死 こと
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 州中 忽地 煉の 凡 守を 抱ふ ちあり 接子の 花も みる
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 ん 抱して その まり ち 伏し たり。 お政の 更不 命と 伝が
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 今の 云ふ 哀れ さら 此 月 まで 由 今朝 まで 由 故 あり
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 ごとく 俗 俗 抱と せよと 樂し くらひし。 此の 業

ござの 今 さら ふう 抱し 一 不測 さま 懐く 人 不 抱 くれ
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 人 傍 あり ぬい ぎく ち 兼 知 なる 物 不 自由 不 なる 不
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 つけ あり 強 くれ ぬい ごと 自ら 入 病 人 不 起 あり ち 入 持
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 あう とも せよ 不 収 あり ち 入 入 其 表 意 者 の 表 表 う 心 の 程
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 不 幸 也 と 言 ず 務 事 不 引 つけ せ び 入 せ せ 返 ら ぬ け 妙 哉
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 の 依 せ ぞ 懸 歌 と いう せん と 其 の こと の 胸 不 勝 け ち 重 重 然
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 独 つ け 妙 大 と 御 め ち 行 必 業 へ つ び 名 の 外 不 表 ち
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら
 又 ち ち 休 せん と 例 の ち 良 人 の 例 今 さら 修 心 意 ち ち
あまらう あんなら あんなら あんなら あんなら

新編 卷之六

十六

ときどき生憎の涙ぐみ角の芳ゆと小胸裏を眠らまはれ
 て冥利もさるんと覺るとは小柄の多き労働をすやく
 睡りりるん次身の後まども見ゆ幾平の月の業、おろりく
 と夏とあり現ともあり幻のあるうとこまに柳の葉の葉末小
 おける雲の身ゆ今宵消人とさふあぞ、澤家が抹息を
 窺ふ小今の熟睡とくうとくえ、肘と胸の胸く小床の上
 へ起るあがりまの當とうち命、不孝のこの身今とを命終る
 ち天の四罰免さる人又う上實の母由遊業ゆえ果は流りり

とも。母子のつらう因果ゆ、罪命小死するも由ま、まのせうの
 約束と手裏の涙小くまけるが、妙の果と傍小在る徳と
 撥とるんぬけはむるす水の双枕えあるも拭とる。くうく
 捲く右子小搦と肌らうげん服腹へお、あぐひく、
 んとんむらうの早見と中。との後今身給食を、腹の宛然春
 小付つ凹みるりて切先達子。腕の力も抜たぐ、火無相業
 輒くも持とあうぬ程あま目く刀と持小搦へぞ、
 励しりくも春のあぐひ、その端と葉と葉と切力と極

一実不実をいふとまゐるその
 節合刀のてて作向小御是
 法の隔紙へ身とらつひく
 刃多くと書ける者小目見
 体か政たると斗まふ氣も
 精細物ともいふはたより
 候へま
 その刀と扱扱
 けり

作者よりいふの一条より
 佐重が類未考候あれごと
 長くして小早らひ今身二
 個の疆小及への程編と
 刷
 巻と揃へ業ある候向と
 述る小見

清談和歌翠卷之六終



